過去世

岡本かの子

池は雨中の夕陽の加減で、水銀のやうに縁だけ盛り上つて光つた。池の胴を挟んでゐる杉木立と青蘆（あし）の洲（す）とは、両脇から錆（さ）び込む腐蝕（ふしょく）のやうに黝（くろず）んで来た。

窓外のかういふ風景を背景にして、室内の食卓の世話をしてゐる女主人の姿は妖（あや）しく美しかつた。格幅（かっぷく）のいゝ身体に豊かに着こなした明石（あかし）の着物、面高（おもだか）で眼の大きい智的な顔も一色に紫がゝつた栗（くり）色に見えた。古墳の中の空気をゼリーで凝（こご）らして身につけてゐるやうだつた。室内でたつた一人の客の私は、もう灯（ひ）をともしてもいゝ時分なのを、さうしないのは、今宵私を招いた趣旨の蛍（ほたる）見物に何か関係があるのかも知れない

と思ひ、すこしは薄気味悪くも我慢して、勧められるまゝ晩餐(ばんさん)のコースを捗(はかど)らせて行つた。だん〳〵募る夕闇の中に銀の食器と主客の装身具が、星座の星のやうに煌(きら)めいた。

　女主人久隅雪子は私と女学校の同級生で、学校を卒業するとしばらく下町の親の家に居たことだけは判つたが、直ぐ消息を断つた。それから十年あまりして私は既に結婚してゐて、良人(おっと)に連れられて外遊する船がナポリに着いた時、行き違ひに出て行かうとする船に乗り込む遽(あわただ)しいかの女に、埠頭(ふとう)でぱつたり出遭(であ)つて、僅(わず)かにお互(たがい)に手を握つた。あとは私の帰朝後を待つ

ていひ残して訣れてしまつた。
　二人ともいはゆる箱入娘で、女学生にしてもすでに知らねばならない生理的の智識に疎いところがあり、よく師友から笑ひ者にされた。その代り二人は競つて難しい詩や哲学の書物を読んだ。さういつた関係から、双方無口であり極度の含羞やでありながら、何か黙照し合ふものがあるつもりで頼母しく思つてゐた。だが私が四年目に帰朝し、それから二三年も経つたのに、かの女からは再び何の消息もなく、同窓の誰も知らなかつた。一度こちらから親の家へ尋ね合した手紙は、久しく前に移転して住所不明の附箋で返されて来た。

ところが突然かの女は郊外の新居といふのから電話して来て、車を廻して寄越（よこ）し、自宅で蛍見物をさすといふのに、のん気な昔の友人訪問の気持を取り戻して、私は来て見たのであつた。

淡い甘さの澱粉（でんぷん）質の匂ひに、松脂（まつやに）と蘭（らん）花を混ぜたやうな熱帯的な芳香（ほうこう）が私の鼻をうつた。女主人は女中から温まつた皿を取次いで私の前へ置いた。

「アテチヨコですの？」

「お好き？」

「えゝ。でも、レストランでなくて素人（しろうと）のおうちでかういふお料理珍しいと思ふわ」

「素人ぢやございませんわ。店の司厨長（シエツフ）を呼び寄せて、みな下で作らして居ますのよ」

「わざ〳〵、まあ、恐れ入りました」

「私、最近に下町で瀟洒（しようしや）なレストランを始めようと思つて、店や料理人を用意してありますのよ」

女主人はレモンの汁を私の皿の手前に絞つて呉（く）れ、程よく食塩と辛子（からし）を落して呉れた。私は大きな松の実のやうな菜果を手探りで皮を一枚づゝ剝（は）ぎ、剝げ根にちよつぽり塊（かたま）つてついてゐる果肉に薬味の汁をつけ

て、その滋味を前歯で刮(か)き取ることにこどものやうな興味を湧(わか)しながら、

「まあ、あなたがお料理屋を、どうして」

「――何かして紛らしてゐなければ――独身女はしじゆう焦々(いらいら)しますのよ」

さう云つて友はちよつと眉(まゆ)を寄せたが、友の内心には何処(どこ)かさとりめいた寛(くつろ)いだ場所が出来、一脈の涼風が過不及(かふきゆう)なしの往来をしてゐるらしくも感じられる。下手な情感的な態度を見せては案外友を煩(うる)さがらさぬともかぎらない。

「それよりも、私、私が今度買ひ取つて落着くやうに

なつたこの家に就いて不思議な因縁話があるの、あなたに聴いて頂かうと思つて……さう陽気な話ぢやありませんの。灯（ひ）をつけて話しますわ」

夕顔の花のやうな照り色のシャンデリヤがぽつとついた。室内の照明に負けて窓外の景色はたちまち幕を閉ぢて、雨の銀糸が黒い幕面にかすれた。一たん眼を瞑（つむ）つた友はまたぱつと開いて私の顔を真面（まとも）に見た。これも昔見た友の癖である。

かの女は女学校を卒業して親の家で結婚前の生活を

してゐる期間に、望まれて父親の知合ひで郊外に隠寮を持つ退職官吏Yの家へ客分として預けられることになつた。

退職官吏Yの考へでは、自分の蒐集品(しゅうしゅうひん)の殊(こと)にこまかい細工ものゝ昔人形や、壊れものゝ陶(すえ)ものの類は、骨董(こっとう)美術品商の娘であるかの女の馴(な)れて丹念な指先が、手入れ保存に適当だと思つたからであつた。かの女の父はまたかの女がたとへ富んだ老舗(しにせ)の長女でも、下町の娘であるからには躾(しつ)けに至らぬ我儘(わがまま)なところがあらう。一度は上層智識階級の家へ入れて見習はしたいといふ昔風の考へがあつた。雪子の父はなまじなよその

夫人よりＹ家の主人を非常に厳格な躾け正しい人と信じてゐたから……

かの女はちよつとした嫁入支度ほどの調度を持つて、Ｙの隠寮へ寄寓した。

あてがはれた庭向きの客座敷の隣の八畳へ調度を収めて、女らしい部屋にしてかの女は落着いた。家長のＹは、かの女が落着くとすぐ部屋に兵児帯（へこおび）をちよつきり結びにした大兵（だいひょう）の体を唐突に運び入れて来て、衣桁（いこう）にかけた紅入りの着ものや、刺繍（ししゅう）をした鏡台の覆

ひをまじ〳〵と見て、
「娘の子を一人持つたやうだ」
これが精一杯のお世辞の挨拶（あいさつ）だといふやうに、ぶつきら棒に云つた。そして直ぐ椽（えん）から盆栽棚のたくさん並んでゐる庭へ下りて行つた。
その後はＹは一度も部屋に見舞つて来なかつた。そしてとても仕切れないほどの所蔵品の手入れを命じたり、観賞するためにあれこれと蔵から出し入れさせられて煩（うる）さかつた。彼は偏執症の蒐集慾以外に精力を使ふことを絶対に嫌つた。早く妻に訣（わか）れてからは、異性には全然関心を持たなかつた。それは彼の最も世の中

で価値ありとする品とか気位とか悧巧(りこう)とかを誑惑(きょうわく)する魔性(ましょう)のものに外(ほか)ならなかつた。たゞ彼は気短かになつて、しば〳〵癇癪(かんしゃく)を起した。それらの性癖の諸点が却(かえ)つて彼を厳格端正に表面化させたのだと雪子はＹに就いての世評の裏を知つた。

何にでも極度に好き嫌ひをつけるＹは、自分の息子兄弟にもそれをした。弟息子の梅麿(うめまろ)は父の唯一の寵児(ちょうじ)だつた。彼はやゝ下膨(しもぶく)れの瓜実顔(うりざねがお)の、こんもり高い鼻の根に迫らぬやう切れ目正しくついてゐる両眼の黒い

瞳に、長い睫毛（まつげ）を煙らせて、地を見入つてゐるときには、何を考へてゐるか誰も察しがつかなかつた。桐（きり）の花のやうに典雅でつくねんとした美しさが匂つた。声も鋭さを鞣（なめ）して楽しい響きを持つてゐた。彼はいつでも不機嫌に近く黙つて孤独で、地へ向けて長い睫毛を煙らせてゐた。雪子は新しく家族の仲間に加はつた自分に対し、若い女性に対し、何の影響をも示さないこの少年に、焦立（いらだ）たしさと、不満を含まないわけにはゆかなかつた。

　だが、その美しさには雪子も呆然（ぼうぜん）として息を吐いた。

父は梅麿を自分の蒐集物（しゅうしゅうぶつ）の愛玩（あいがん）品の中に数へ、しか

もその中で最も気に入つた一つのものゝやうに、書斎で、庭で、二人は大概一緒だつた。そして父はこの息子に下手（したて）からお世辞を使ふ態度を取つてゐた。梅麿は父がお世辞を使ふ気持を見抜いて、とぼけて悠々とお世辞を使はれてゐた。だが決して調子に乗らなかつた。そして、父が理由もなく癇癪（かんしゃく）を起しかけて来ると、少女よりやゝしつかりした綺麗（きれい）な唇を嬌然と笑みかけて、あどけないことを云つたり、親を煽（おだ）てたり、他人の悪口を云つたり、およそ父の弱点が喜びさうなところを衝（つ）いて、素知（そし）らぬ顔で父の気分を持ち直させることに、気敏（けざと）い幇間（ほうかん）のやうな妙を得てゐた。

雪子はいやらしいと思ふ以上に、その技巧の冴(さ)えに驚嘆した。だが、梅麿は父以外にはその手は絶対に使はなかつた。

父の気紛れが、面白くない仕辛(しづら)い仕事を望むときには、梅麿はすーつと脇へ除(よ)けた。夜中に急に風呂を沸かさせたり、椽(えん)の下の奥に蔵(しま)つてある重いものを取出さしたり――さういふときには兄の鞆之助(とものすけ)が、ぶつ〱いふ召使を困りながら指揮して、その衝(しよう)に当つた。

父はこのことを知つてゐて、

「梅は狡(ずる)いやつだ」

といつて笑つたが、その狡さが気に入つてもゐた。

兄の鞆之助は反対に調法の外(ほか)、何から何まで、父の気に入らなかつた。父は兄息子の顔を見るとむつと黙つて仕舞(しま)ふか、癇癪を浴せかけた。命令通り出来上つた仕事も、その命令通りにした愚直なことが、そこに叱言(こごと)の隙間(すきま)もないことで父を怒らせた。兄はしじゆうおど〳〵してゐて、眼鼻立ちに神経の疲労と愁(うれ)ひの湿りがあつた。濃い頭の捲毛(まきげ)だけが兄弟似寄つてゐた。兄弟は父が現代教育の方針に不満といふ理由で、一人は中学を、一人は高等学校を、途中から退学させられて、通つて来る二三人の家庭教師に就(つ)かされてゐるが、

実は父が家庭に於ける享楽（きょうらく）生活に手不足を来（きた）すのを、父は極力嫌つたためでもあつた。

　兄の鞆之助は雪子の部屋へよく遊びに来た。雪子が部屋の周囲に、蔵から出して来た、真（ほん）ものゝ植物以上に生々と浮き出てゐる草花が染付けられてゐる鉄辰砂（しんしゃ）の水差や、掌（てのひら）の中に握り隠せるほどの大きさの中に、恋も、嘆きも、男女の媚態（びたい）も大まかに現はれてゐる芥子（けし）人形や、徳川三百年の風流の生粋（きっすい）が、毛筋で突いたやうな柳と白鷺（しらさぎ）の池水（ちすい）に彫（きざ）み込まれた後藤派の目貫（めぬ）きのやうなものを並べて、自分の店から持つて来たいろ〳〵の専門の道具や薬品を使つて手入れしながら、

面倒臭く思つて伸びをしたり、または芸術といふ不思議な幻術が牽（ひ）き入れる物憎い恍惚（こうこつ）に浸（ひた）つたりしてゐると兄はおづ〳〵入つて来る。

彼はかの女の傍に立膝（たてひざ）して坐（すわ）ると、いくらか手入れを手伝ひながら、かの女の気配を計つた。かの女の丸い顔をいぢらしさうに見た。

「うちは、これでね、思つたほど豊かぢやないんですよ。何しろ父はあゝいふ風でせう。何でも見付け次第買つちまつて、とき〴〵月末の生活費の払ひの現金にも困ることがあるんです」

かの女は興味索然としながら話に釣り込まれた。

「あなた方ご兄弟は将来どうするお積り」

「父が生きてゐるうちは今の財産を使つちまつても、父の恩給で米代ぐらゐはありますが、父が死んだらこんな道具類でもぽつ〳〵売つて喰つて行くより手はありません。それにしても贋物（にせもの）が多くて」

「持参金附きのお嫁さんでもお貰（もら）ひになつたらいかゞ。ご兄弟とも美男子だしお家柄はよし」

かの女は揶揄（からか）つた。鞆之助は真（ま）に受けた。

「だめですよ。第一僕等に学歴はなし、それにかう見えて、僕は女に対してうんと贅沢（ぜいたく）な好みを持つてゐるんです」

「弟さんは」

「あれは父と同じに女嫌ひらしいです」

さうかと思ふとまたの日は急に朗らかで、いそ〳〵して来て、どこから探し出して来たか、古風な猥（みだ）らな絵巻物をかの女にそつと拡げかけるやうなこともあつた。かの女は極力平静を装つて、彼の顔を正視した。

「それどこが面白いのでございます」

すると、彼は照れて、

「僕にはものを考へないといふモツトー以外には生きる方法はないんです。単に刹那（せつな）々々の刺戟（しげき）のほかには……」

と負け惜しみのやうなことを云ひながら、手持ち不沙汰（ぶさた）にそれを巻き納めて部屋を出て行くのだつた。

父のＹは旧幕の権臣の家の後嗣（こうし）者であつた。旧藩閥の明治の功傑たちは、新政府に従順だつた幕府方の旧権臣の家門を犒（ねぎら）ふ意味から、その後嗣者を官吏として取り立てた。Ｙは相当なところまで出世した。しかし、Ｙの持つて生れた度外れの気位と我執（がしゅう）の性質から、たうとう長上（ちょうじょう）と衝突して途中で辞めて仕舞（しま）つた。遺産のあるまゝに生来の蒐集癖（しゅうしゅうへき）に耽（ふけ）つて、まだ壮年を

ちよつと過ぎたくらゐの年頃を我儘三昧（わがままざんまい）に暮さうと決めてしまつた。恐るべきエゴイストの墓標のやうな人間であつた。

Ｙの権高（けんだか）な気風と、徹底した利己主義に、雪子はやゝ超人的な崇高な感じは受けたが、下町娘の持つ仁俠（にんきよう）的な志気はＹにひどい反抗と憎みを持つた。あはよくば、Ｙが寵愛（ちようあい）してゐる弟息子を奪つて、父の傲慢（ごうまん）の鼻を明かしてやらうとさへヒステリカルに感じた。

兄の息子は、膨れ目蓋（まぶた）のしじゆう涙ぐんでゐるやうに見える、皮膚の水つぽい青年だつた。女のことで一度落度（おちど）があつたといふ噂（うわさ）だが、しかしそのことが原

因ばかりでもない蔭の人の性分を十分持つてゐて、父や弟から、身内と召使ひとの中間の人間に扱はれ、雇人（やといにん）に混つて、自然にこの別寮の家扶（かふ）のやうな役廻りになつてゐた。しかし、見かけほど悲劇的な性格もなく、どこかのん気で愚（おろか）なところがあつて、情操的にものを突き詰めては考へられなく、萍（うきくさ）の浮いたところがあつた。

母のゐないこの別寮で、兄の鞆之助は主婦のやうな役目にもなつた。雪子が来て二月ほどしたある日、弟

の梅麿はかの女の部屋に来てゐた兄のところへ珍しく入つて来て、
「兄さん、僕に出して呉(く)れた着物、綻(ほころ)びが切れてるぢやないか」
と袂(たもと)をあげて脇を見せた。
すると兄ははら〱しながら、美しく重圧して来る弟の黒い瞳に堪へないやうに眼を伏せて目蓋(まぶた)をぴり〱させ、
「だつて、いま、婆(ばあ)やも女中も使ひに出しちやつてゐないんだから仕方がないよ」
すると梅麿は苦いものに内部から体を縒(よ)ぢ廻される

やうに憂鬱な苦悩を表情に見せて、

「もう浴衣でなきや暑くて、お父さんにいひつかつた庭の盆栽へ水をやりに行けないぢやないか——兄さん自分で縫つてお呉れよ」

兄の不甲斐ない性質に対する日頃の不満と、この弟を凝つた瑩玉のやうに美しくしてゐる生れ付き表現の途を知らない情熱と、生命力の弱いものに対しては肉親でも奴隷のやうに虐げて使つてしまふ親譲りのエゴイズムとが、異様で横暴な形を採つて兄に迫つた。

兄は困つたやうな情けないやうな表情をして、突き付けられた浴衣に近寄つて行つた。

しかし、傍に雪子のゐるのを見ると、薄い乾いた下唇をちよつと舌の先で湿らしてから、兄はにやりと笑つた。

「無理をいふなよ——だめだよ。男になんか、縫へなんて……」

そして腕組みをして昂然（こうぜん）とした態度を作つた。それには不自然なところがあつた。兄はありたけの勇を揮（ふる）つて弟の瞳に睨（にら）み合つた。

雪子の立場が切ないものになつて来た。雪子は彼女の箪笥（たんす）の観音開きから急いで針道具を取出して来て、弟の持つてゐる浴衣に手をかけた。

「何でもありませんわ。あたし縫つてあげますわ」
すると、梅麿は浴衣を雪子の手からすつと外(は)づして、なほ兄に向つていつた。
「兄さん縫つてお呉れよ。いつもうまく縫ふぢやないか」
兄は赤くなつた。弟は兄になほも迫つた。場合によつては平気で、兄が雪子に聞かれて、もつと顔を赤くしさうな暴露の意地悪さを用意して、ぜひ兄に縫はせないでは置かない気配を示した。そこにはまた、雪子といふ第三者が入り込むのを潔癖(けっぺき)に嫌ふいこぢさもあつた。

雪子は弟が肉親の兄に対する執拗(しつよう)な残忍な仕打ちと、また女の身の雪子が折角(せっかく)の申出(もうしで)を態(てい)よく拒否された恥とで、心中怒りが盛り上つて来た。何として仕返しをしてやらう――雪子は針道具をそこへ置いたまゝ、青葉の映る椽側(えんがわ)へ離れて行つて、そこの柱へ凭(もた)れてまじ〳〵と弟を見詰めてゐてやつた。

兄は雪子の気配を察するだけに、いよ〳〵その場の処置が困難になつて、ただ生(なま)返事をして萎縮(いしゅく)してゐた。

雪子はふと、母もなく我執の父の下に育つて、情のしこつた弟息子の親への甘えごころが、兄へかうも変つた形を採つて現はれるのではないかと気がついた。

そして、生命力の薄い、物に浮(うか)れ易(やす)い兄は、到底弟のこの本能の一徹な慾求を理解もし負担もしてやる力はないのだと思つた。兄は彼の紛らし易(やす)い性分から、彼の愛の慾求を何かに振り撒(ま)き、繋(つな)ぐことによつて、彼自身だけの始末をつけてゐた。彼はこの頃いよ〳〵雪子に向けて心を寄せる傾向が見えてゐた。

兄は雪子の眼の前で針仕事をする姿を、何としても見せたくないらしく、いかに弟に迫られても薄笑ひしてゐて、応じなかつた。そして顔色を蒼(あお)ざめさしたり、急に赤めたり、しかもわきへ避けて行かないで、だん〳〵眼と口とが茫漠(ぼうばく)となるところを見ると、一種の

被虐性の恍惚に入つてゐるものゝやうに見えた。
弟はこれに対してます〳〵執拗になり、果ては凡ゆる侮誣の言葉を突きつけて兄に向つた。
雪子は見てはゐられない気がした。こんなに執拗に取組まなければ愛情の吐け口を得られない兄弟の運命や性格の原因をどこへ持つて行つたらいゝか、その詮索をするのさへいま〳〵しいほど、心を不快に底から攪き廻された。いまから考へると多分の嫉妬もあつたやうに思ふ。さういふ険しい石火を截り合つて、その裂目から汲まれる案外甘い情感の滴り――その嗜慾に雪子は魅惑を感じた。雪子の細胞には、他人の

さういふ仕打ちの底の心理を察して羨むだけの旧家育ちの人間によくある、加虐性も被虐性も織り込まれてゐた。

弟はたうとう兄の薄皮の手首を、女のやうにじーつと抓つた。兄は真赤に顔を歪めてそれを堪へてゐた。雪子は激動の極、少し痴呆状態になつて却つて逆に刺戟を求めるこゝろから、もつと眼の前で惨劇の進むのに息詰まる興味を持つやうになつてゐた。

それが終ると弟は浴衣を抛り出して、手早く帯を解

いて、それから着てゐた袷（あわせ）も脱いだ。
「僕、縫つて呉（く）れないなら、裸で庭へ出て行くから——」
行きかける風さへみせた。
兄はあわてゝ弟を捉（とら）へた。
「だめだよ。そんなになりで、君、感冒（かぜ）をひくぢやないか」
兄は弟が小さい時感冒から肋膜（ろくまく）の気になつたのを覚えてゐて、それを気遣（きづか）つたものゝ、もつと大きな原因は、この兄弟は生まれつき肉体の露出については不思議な羞恥（しゅうち）の本能を持つてゐた。他人に見られるやうな

ところで、どんな必要の場合でも肌を脱いだり、裾（すそ）をからげたりは決してしなかつた。兄弟同志の間では、なほ更それは猥（みだ）らなものを見るやうに嫌つた。

いま弟がそれを敢（あえ）てするのは、必死の羞恥を突き付けて、兄に必死の決意を促す最後の脅迫手段だつた。

「君、裸を垣根から通る人に見られるぢやないか」

「かまふもんか」

兄弟は死のやうに蒼（あお）ざめて争つた。

兄は息が切れるやうに喘（あえ）いだ。眼を伏せて、なるべく見ないやうにして、着物を弟に着せようとした。弟は肩ではねのけた。幾度か少青年の白磁色の身体が

紺竪縞（こんたてじま）の大島の着物に覆はれては剝（む）け出た。兄はその所作の間に、しばしば雪子の方を振り向いてかの女の気配を窺（うかが）つた。

　兄の気持を察すると、弟の童貞で魅惑的な肉体を、自分が心を寄せかけてゐる若い娘に見られることは嫉（ねた）ましく厭（いと）はしかつた。だが我意を貫（つらぬ）くことゝ兄を脅（おど）すことの一図に耽（ふけ）る弟は、今は全く雪子の存在などは無視した。弟は一体ふだんから雪子の存在をどう考へてゐるのか、女といふものに対してどういふ感受性を持つてゐるのか、全く不明だつた。それは雪子を寂しく焦立（いらだ）たしいものにしたが、この場合、彼が何人（なんぴと）に対

しても嫌ふ裸身を雪子の前ですらりと現はすといふことは、たとへその目的は兄に向つてゞあるとはいへ、副作用として雪子は無視の軽蔑(けいべつ)を斜(はす)に受けないわけにはゆかなかつた。だが、こゝに至つて雪子は怒らうと思つてもなぜか力が脱けた。

雪子を女として少しも顧慮されない自分を、急に魅力のない卑しいものに感じて、弟に対して感じてゐるふだんの心の底の寂しさを一層深めた。

「仕方がないやつだなあ」

兄はたうとう負けて、雪子がそこへ置いて来た針道具を、ちよつとかの女に会釈(えしやく)して、手元へ引き寄せた。

針さしから手頃の針を抜き取り、針先を頭の髪の毛へ突き込んで油をにじませた。アイヌの郷土細工の糸巻から、弟の着物と似合ひの色糸を見付けて、針の孔（めど）へ通した。それからいかにも物馴（ものな）れた調子で綻（ほころ）びを繕（つくろ）ひにかゝつた。

男の針仕事――。いかにぎこちなく、佗（わび）しい形でそれが行はれることだらう。雪子はあらかじめぞりつと寒気を催すと共に、その不快な醜さによつてかの女の神経の肌質（きめ）をさゝくれ立たされることを覚悟してゐたが、兄の手振りを見ておや〳〵と思つて安心した。より以上に感心した。それは女のする通りの所作に違ひ

ないが、しかしその通りを男の青年がするのに、少しも男の格を崩し、また男の品位を塩垂(しおた)れさすやうな女々(めめ)しい窪(くぼ)みは見出(みいだ)せなかつた。従容(しょうよう)として、たゞ優しい仕事に、男がいたはり携(たずさ)はつてゐる自然の姿に外(ほか)ならなかつた。結局、兄の性格としてそれは身についた仕事であり、弟へしてやつてゐる平常からの馴(な)れであり、実は好みの就業となつてゐるのかも知れない。

「男の針仕事もいゝものだ」

と、雪子は胸の中でさう嘆声を漏(も)らしてゐた。

　だが、雪子は羞明(まばゆ)いのを犯して、兄の縫ふ傍に立つ

てゐる弟の裸身に眼をやると同時に、全面的に雪子に向つて撞（つ）き入らうとする魅惑を防禦（ぼうぎょ）して、かの女の筋肉の全細胞は一たん必死に収斂（しゅうれん）した。すぐ堪へ切れない内応者があつて、細胞はまた一時に爆発した。そしてすつかり困迷して痴呆（ちほう）状態に陥つた雪子の心身へ、若く甘い魅惑は水の如く浸（ひた）り込んだ。

　雪子はこの若きダビデの姿をいかに語らう——ミケランヂエロの若きダビデの彫像の写真にしても、このときまだ雪子は知らない。後に欧洲（おうしゅう）の彷徨（ほうこう）の旅で知つたのである。それは伊太利（イタリー）フロレンスの美術館の半円周の褐色の嵌（は）め壁を背景にして立つてゐた。それが

持つ憂愁の甘美は、西洋的の動物質と東洋的の植物性との違ひはあるが、梅麿が持つものとほとんど同じだつた――。健かな肉付きは、胸、背中から下腹部、腰、胴へと締(しま)つて行き、こどもの豹(ひょう)を見るやうだつた。流暢(りゅうちょう)で構梁の慥(たし)かな肩の頂面に、つんもり扇形の肉が首の附根の背後へ上り、そこから青白く微紅を帯びた頸(くび)が擡(もた)げられた。

　だが、雪子の魅(み)せられたのはさういふ一々のものではない。何代か封建制度の下に凝り固めた情熱を、明治、大正になつてまだ点火されず、若(も)し点火されたら恨(うら)みの色を帯びた妖艶(ようえん)な焔(ほのお)となつて燃えさうな、全

部白臘で作つたやうな脂肉のいろ光沢（つや）だつた。それにはまた喰ひ込まれてゐる白金の縄を感じた。

久隅雪子はほたる見物にことよせて私を招き、文学者である私にだけは是非（ぜひ）この話をして、自分のこの家に落着く気持を分担して貰（もら）ひ度（た）いのだつた。この家はその奇矯（ききよう）な親子兄弟の棲（す）んでゐた家だつた。雪子は話し終つて、ほつとして云つた。

「その父親が病死すると直（じ）きでしたの、その兄弟が心中しちまつたのは……」

底本：「日本幻想文学集成10　岡本かの子」国書刊行会
１９９２（平成４）年1月23日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集　第三巻」冬樹社
１９７４（昭和49）年４月発行
初出：「文芸」
１９３７（昭和12）年７月
※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。
入力：門田裕志
校正：湯地光弘
２００４年2月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。